變の進行のうちに整理研究がすゝめられ、四年有半いまこゝにこの報告書の刊行をみるに至つたことはまことに慶賀すべきことである。

それによるとこの上都の外城は石築方形、一邊の長さ十二町四十四間、南北おのおの一門、東西おのおの二門、みな甕城のあとをとゞめ、角樓四座、敵樓各六座もあきらかにみとめられる。内城はそのほゞ中央後よりにあり、東西五町六間、南北五町三十六間の長方形、東西南におのおの一門あり、壕築、城角に角樓はあるが、甕城と敵樓とはない。内城のなかには各私の建築遺址が相ならび、歴々としてその迹をたどることができるが、位置は錯然としてをり、その配置に一定の企劃があつたとはみえないし、また文獻にみえる宮殿官衙の名にも比定することができない。

禁苑は外城西方から北方にわたり、廣袤約八十五萬坪、土城をめぐらし、濠をうがち、北に二門、西南各一門の門をひらき、門にはみな甕城がある。

外城東北隅と西北隅には一對の寺院址あり、前者は龍光華嚴寺後者は乾元寺に比しうる、東南隅、西南隅の建築址もまた「華嚴寺碑」にみえる東西一對の老子宮であらうかといふ。

なほ都城採集の遺物は石彫、瓦塼、陶磁であるが、粗樸な、しかし雄勁な石彫唐草文、コバルト青の釉瓦、均窯、影青、龍泉窯の陶磁片など、みなありし日の元朝文化をかたるものとして興味がふかい。

なほ附錄に駒井和愛氏の「熱河灤平縣附近の遺跡」、石田幹之助氏の「元の上都に關する主要文獻解題」の二篇をおさめてゐる。

いまや、滿洲事變、支那事變を契機として、蒙古民族は覺醒し蒙古政府が樹立された。新しき蒙古の胎動が感ぜられるとき、あくまでこの蒙古民族の自覺と躍進とを期待してゐるわが國の學者によつて蒙古民族の光榮ある古都、閃電河畔にねむつてゐた上都の全貌が、こゝに闡明されたことは決して意味の少いものではなからう。これこそ正に學術が、文化建設にふれる一齣であるといへよう。それにしても上都の調査研究について、さらに要望されるのは上都の重要さにおさおさおとらぬその大都、つまり北京の調査研究であつて、事變後急速な變化をかうむりつゝある上都の遺構は至急徹底的な調査をおこなはなければ、憾を永遠にのこすことになるであらう。（四六倍判一二六頁、圖版七五、昭和十六年十一月刊、座右寶刊行會發賣、定價二十圓）〔水野清一〕

法隆寺論攷（文學博士喜田貞吉遺集一）

喜田新六編

法隆寺再建非再建論爭史

足立康編

いま此の二つの書物を綴めて紹介することは、一つの意義を認めるが故である。前著の發行後約一年を經て上梓された後者は、もと法隆寺論爭の推移をその中心人物たる關野・平子・喜田等諸

氏の代表的論稿によつて傳へんとするものであるとは云ひ乍ら實は編者足立博士がそれ等を通じて自家の新法隆寺再建論を強く主張したものに外ならずその點で前著と對蹠をなして居り、引いて兩書は離すべからざる關聯を有しこゝに現在の法隆寺に關する二つの著しい主張が見られるが故である。

さて『法隆寺論攷』は、喜田博士が生前三十五年間の長きに亘つて發表された法隆寺建築年代に關する主要な論文大小二十二篇を輯錄し、卷末には讀者の便を慮つて「法隆寺建築年代論概觀」なる一文を附加したものであつて、もと博士自らの計畫せられた所を踏襲、令息新六學士が編纂に當られたものである。文中可なりの重複が目立つてはゐるがこれによつて所謂法隆寺論爭を通じて再建論を主張しつゞけられた博士の主張並に新資料の出現に依る研究進展をば知悉し得る點で便宜な書物と云へよう。これに對して『法隆寺再建非再建論爭史』の方は、その主旨として擧げるところ、既述の如く、法隆寺論爭の沿革を關係主要論稿によつて知らしめんとするにあると云ひ編纂の體制は、先づ卷頭に論爭經過の概要及び年表等を揭げ、次に簡單な解說を附して、主要な關係論文をば年代順に排列し、その間に各時期の論爭についての略述と主要論稿の目錄を併せ挿入すると共に最後に自家の法隆寺新再建論を擧げて其の誤らざることを强調した點で、云はゞ前半が博士の主張を歷史的發展の上に合理化せんとした趣が多い。

今こゝに擧げた兩著を一讀して過去半世紀に亘る大論爭を顧るとき、論爭はそれ自體法隆寺研究、延いては日本美術史闡明の一に重要な意義を有すること勿論であるが、また一方、明治より大正・昭和へと一路進歩の途上にある本邦學界に於いて繼續され來つたこの論戰の經過は、自ら這種學問の研究方法の發展を一つの實際問題に卽して最も暗示的に物語つてゐるやうである。一體法隆寺再建非再建の論爭の發端は遺物との根本的矛盾とその一方的主張に存し、謂はゞ國史學者と建築學者との見解の相違に始まるものであつた。しかし文獻の記するところも、遺物の示すところも共に眞を傳へて、これを否定することは出來ず、結局文獻に依據した再建論も實物的證據に服從し、また遺物に立脚した非再建論も記錄的證據に屈服して、問題は文獻と遺物との矛盾を如何にして調和すべきかに集中されて今日に至つてゐるのである。事こゝにまで到達したのは實に學說の進歩であり、これを方法論的に云へば文獻と遺物との綜合研究の必須を暗示する。未だ定論を得ない歷史考古學の研究方法に向つて、法隆寺論爭の歷史は、過去半世紀に亘る現實に立脚して、一つの解明の鍵を與へるものであらう。

さて元に返つてたほ書物それ自體について云へば、兩書とも研究者に與へる便宜頗る多い好著ではあるが、たゞ一つ兩著に相似た遺憾の點が無いでもない。卽ち前著はその卷末の「法隆寺建築年代論概觀」中に於いて、喜田博士と反對の學說を紹介するに當つて博士の反駁をそのまゝ採用してゐて客觀性を缺いてゐることであり、後著にあつては、編者の足立博士が論爭を客觀的に記述すると云ふ意圖よりも寧ろその歷史を通じて實は自家の新非再建

論の誤らざるを立證せんとしてあることが明に窺はれる點である。

兩博士とも問題は既に解決したと云はれてあるが、而もその間に相容れないものがあるのを思ひ、なほ論爭自體の發展の迹を顧みる際問題を解決に導くもの、將來に於ける我が美術史、考古學の學問的進歩に俟つべきであることを思はざるを得ないのである。（「法隆寺論攷」菊版四九四頁、定價五圓五十錢、地人書館發行、「法隆寺再建非再建論爭史」菊版三六八頁、定價三圓八十錢龍吟社發行）〔毛利久〕

彙報

昭和十七年度史學科　卒業論文題目

▼國史專攻　（一四名）

「安土桃山時代に於ける社會進展に關する一考察」　淺井一郎

「鎌倉武家社會の一考察」　織田昭磨

「日本藝術の精神史的研究」—中世都市と農村の趨向—　北原一敏

「洋學に對する歴史的考察」　鈴木恒生

「德政一揆を通じて見たる室町時代の世相と庶民の擡頭」　千足宏

「吉利支丹文化の渡來について」　西瀬戸厚美

「中世近世過渡期の武士階級に關する一考察」　奏密

「中世末期の天下統一の思想」　平田守德

「鎌倉時代の歴史思想について」　平松令三

「足利幕府の對明貿易」　廣海浩二

「北畠親房と其の時代」　宮脇信久

「中世末期社寺領崩壞に關する一考察」　守田長兵衛

「中世海外發展史の文化史的考察」　藻場一海

「近世文化の一考察」　渡部是

▼東洋史專攻　（十名）

「關中法と葉變法」　大杉正雄

「清代團練鄉勇について」　殿界美房

「地丁銀について」　野邊正盛

「清末教案の一考察」　長谷川一郎

「河北三鎭の成立とその變遷」　藤田國雄

「唐代通貨現象に就て」　眞島行雄

「春秋戰國時代の宗族」　柳田陽一

「支那上代に於ける請雨の儀禮に就いて」　山口格太郎

「五代時代の佛教に關する二三の考察」　善峰憲雄

「壬生兵變の一考察」　李丙周

▼西洋史專攻　（七名）